

えぼっく

第16巻1号通刊89号
2015年1月9日発行

合資会社金井書店発行

営業本部編集

〒161-0033 東京都新宿区下落合3丁目20番2号
TEL 03-5996-2888 FAX 03-3953-7851

URL <http://www.kosho.co.jp> E-mail office@kanaishoten.jp

新たな一歩

日頃、金井書店並びにR.S.Booksをご利用いただき誠にありがとうございます。

このたび、昭和58年に八重洲店を開設して以来、三十余年在籍してきました八重洲地下街の営業をこの3月に卒業して、金井書店の原点に戻ることといたしました。永らく八重洲でご利用いただいた皆さまには深く感謝申し上げます。

八重洲地下街での営業は、思い起こせば無茶なことの連続で経営者としては失格であったのかと反省しております。しかし、その無茶によって古書を多くの皆さまのお手元に届けることができたのですから後悔はしておりません。

今、悔やんでいることは、若い方たちに古書、書物全般の魅力を伝えられず、裾野を広げることができなかったことです。八重洲地下街で営業している一番の目的はここにあったので、とても残念です。

古書業界、いや、書物関連の業界全体には不況感が漂っていますが、元気に店舗を増やしている頼もしい若者もいます。無茶と見る同業もいるようですが、無茶もエネルギーのひとつなので頑張って成長して欲しいと願っております。

金井書店は昭和4年創業時に戻り、目白という地で、目白に相応しい古書店を創造していく所存です。骨董店が何軒もあり、絵本のお店、こだわりのおもちゃ屋さん、話題のケーキ屋さんもあります。昭和時代とは趣の変わった目白は“New古書店”を創造するには適していることでしょ。

同時に、今日の主要業務“出張買取”は積極的に対応して参ります。当店を永らくご利用いただいたお客さまのご整理には、特に“親切丁寧”をモットーに出向いております。初代、先代とご交誼いただいた皆さまにご下命いただけることは何よりの財産です。感謝。

この“えぼっく”も商品のご紹介を増やしながら継続し、紙媒体とデジタルでのご提供をいたします。ブログやメルマガも活用して皆さまとの交流ができれば幸いです。

私どもが加盟する東京都古書籍商業協同組合が運営する“日本の古本屋”もこの1月に大リニューアルされ古書探しの便利ツールとして進化、成長します。様々なツールの力で、古書の世界に触れる方が増えることを願っております。

戦後70年、戦争体験者が少なくなり、戦争の本当の恐ろしさを知らない世代が国を守るための戦いも容認しようとしています。武力よりも強靱な心と絆、知恵を生かして暖かな日々が続きますことを願ってやみません。書物をこよなく愛した戦中派、団塊の世代が今日の安らかな日々を守り続けたエネルギー源はどこから生まれたのでしょうか？書物に不思議な力があるからだろうと思うのは私だけでしょうか。いや、書物の魔力が平穏な日々の一助であることを信じて古本屋を続けて参ります。今後とも相変わらずのご愛顧を賜りたくお願い申し上げます。

皆さまのご健康とご多幸を祈念申し上げます。

金井書店 花井敏夫

砂漠の旅へ

近頃、わたくし的には探検本ブームが到来している。『コン・ティキ号探検記』でくすくす笑い、『空白の五マイル』でつーつと涙した。『エンデュランス号漂流』を読んだときは、氷のなかで身動きが取れなくなる夢を見て真夜中に飛び起きた。苦しくて危険だとわかっていることに人はなぜ挑戦するのか。未知のものを見たいから、限界

に挑みたいから、学説を証明したいから、そこに山があるから??理由はさまざまだろうが、すごく興味がある。暑いのも寒いのも苦手、知力も体力も精神力もない弱っちい現代人の私。自分には絶対に無理だからこそ、憧れる。

「アラビアのロレンス」ことトマス・エドワード・ロレンスは、考古学者で、探検家でもあった。少年時代から文学と歴史に関心を持ち読書に没頭。オックスフォード大学で考古学を学ぶ。在学中に論文の準備のため単身、徒歩でアラビアを旅し、十字軍時代の古城を調査。砂漠に魅せられていく。アラビア語を習得し、卒業後は大英博物館の中東遺跡発掘調査に参加。第一次世界大戦が勃発すると、イギリス陸軍情報将校としてアラブ民族の独立運動に献身した。

映画『アラビアのロレンス』を初めて観たのは、東京に出てきてすぐの学生のとき。映画館がたくさんあるのがうれしくて映画ばかり観ていた。当時のことを思い出そうとすると、映画館でぼんやり座っているところしか浮かばない。勉強しろよ、といたいところだが、ひょっとすると学校にいる時間より映画館にいた時間の方が長かったかもしれない。過敏なお年頃、不慣れた土地で一人暮らしをはじめたばかりの私にとって、物語の中で描かれる主人公ロレンスの孤独と不安定さは、衝撃的だった。

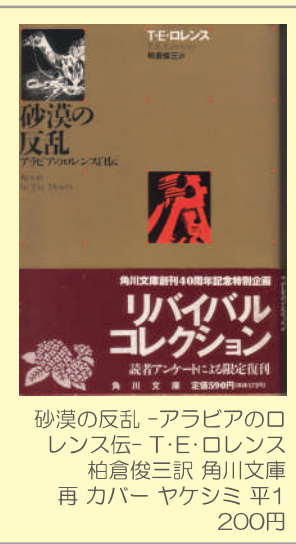
映画の中で、ロレンスが新聞記者に「砂漠のどこに惹かれるのか」と質問され、「清潔さ」と答える印象的なシーンがある。確かに、大きなスクリーンに映し出される砂漠は厳しく清潔で、とんでもなく美しかった。地平線からゆらゆらと昇ってくる大きな太陽。砂丘の風紋。白く輝く砂の平原。真っ白なアラブ服を翻してその地を駆け抜けた「砂漠の英雄」の、苦くて、痛ましい結末。



空白の5マイル 角幡唯介
集英社 初カパー帯 ヤケ
平22 1冊 700円



エンデュランス号漂流
アルフレッド・ランシング
山本光伸訳 新潮社 6版
カパー帯 平11 1冊
1,000円



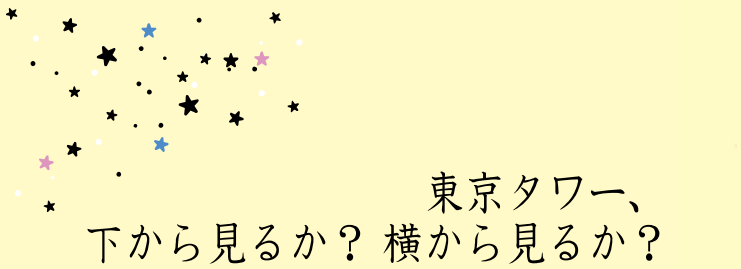
砂漠の反乱 -アラビアのロレンス伝- T.E.ロレンス
柏倉俊三訳 角川文庫
再カパー ヤケシミ 平1
200円

観終った後、いてもたってもいられなくなってやみくもに歩いた。方向音痴なので、自分がどこにいるのかわからなくなり、さらに何時間も歩くはめになるというオマケつきで。無事アパートの部屋にたどり着いてからも、ちっとも眠れなかった。

久しぶりに本棚の奥から『砂漠の反乱』（ロレンスの自伝『知恵の七柱』のダイジェスト版）を引っ張り出してみた。ぱらぱらめくってみる。読んだはずなのに全く覚えていない。最初から読み直すくらいなら、いっそのこと未読の『完全版 知恵の七柱』に挑戦するか、と現在少しずつ読みはじめたところ。全5冊…道は長い…。

いまでも、気持ちかもやもやすると何時間も歩くことがある。汗をかいて、ふくらはぎが痛くなって、体が重たくなって、それでも歩き続けると、頭のなか空っぽになって、なんにも感じなくなる。不思議な気分。探検ってこんな感じかも、と思ったりする。全然違うのかもしれない、とも思う。

R.S.Books 猪爪奈美恵



東京タワー、下から見るか？横から見るか？

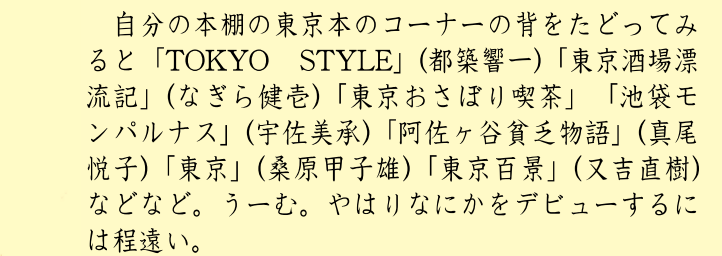
18歳の某月某日。どの学校に願書を出すか迷っていたわたしに担任の先生は「そんなに決められないならこれで」とポケットから100円玉を差し出した。裏か表か。投げて出た方の学校に決めなさいと。そんなウソのようなマコトの話のすえわたしは某学校を受験しめでたく合格、母に付き添ってもらって夜行列車で都会に出てきた。正確にはそれは東京ではなく海に面した郊外の街、だけでも。

故郷を離れはじめて住むことになるその街の家賃なるものに恐れおののき、ここならなんとか…と学生課の張り紙をみて決めたところが今でいうところのシェアハウス。家具、家電もろもろ全部付きで時々大家さん一家+イヌがやってきて家の手入れをしてくれつつ食事を用意してくれたり、同居人Aちゃんのところにはおじいちゃん作の美味しいお米や季節の果物が定期的にわんさと届くからおすそ分けしてもらったり、国籍の違う同居人Bちゃんは元々医者を目指していたそうで頭が痛い寝こんでいたりすると「このツボがキクヨ」と心配してくれたり、それぞれの友人がなんだかんだとやって来たりと消去法で決めたとは思えないほど楽しい暮らし。だから後にテレビドラマで「すいか」（木皿泉脚本、2003年放送）を見た時に、あっこれは自分の物語だ、と思った。

と、ここまで読んだ方は「なんだ、行き当たりばったりな話ばかりじゃないか」とお思いになるかもしれませんが、たぶんその通りです、すみません。学生に貸すというルールだったのと職場に通うのにちょっと不便だったので仕事をはじめて半年くらいでその共同生活から卒業することに

なるのだけれども、都会を過度に怖がったり色眼鏡で見たりすることがあまりなかったのはこの暮らしのおかげかも。

というわけでわたしの東京暮らしがはじまるのはそんなふうに郊外で長めの助走をしてからのこと。岡崎武志「上京する文學 漱石から春樹まで」（新日本出版社）を読むと作家たちがみな(著者の岡崎さんももちろん)並々ならぬ東京への想いを抱えていたことにきゅんとする。「生まれ育った町ではないからこそ、新鮮な思いで風景や人々を眺めることができた。そこには『憧れ』の眼差しがあった。『上京者』としての発見もあったのだ」と序説にあるのだが、たくさんの方の胸をうつ作品を残すということはそういうことなのだろう。同列に語るのには申し訳なさすぎるけれど、結果東京にたどり着いてしまった身としてはその情熱、熱い視線が羨ましかったりする。かといってももちろん育った街でもないのだから完全に平熱でいられるわけもなく、この宙ぶらりん感は何だだろうと時々思う。そういえばいわゆる〇〇デビューなるものを一度もしていない。人生経験として一度くらいしておいてもよかったのかな…



自分の本棚の東京本のコーナーの背をたどってみると「TOKYO STYLE」（都築響一）「東京酒場漂流記」（なぎら健壱）「東京おさぼり喫茶」（池袋モンパルナス）（宇佐美承）「阿佐ヶ谷貧乏物語」（真尾悦子）「東京」（桑原甲子雄）「東京百景」（又吉直樹）などなど。うーむ。やはりなにかをデビューするには程遠い。

と思ってマンガ本のコーナーをごそごそしてたら先輩がいらっしまった。高野文子「るきさん」。おそらく東京生まれではない30代の女性るきさんのマイペースだけど地に足のついた暮らしぶり。時代にわりに寄り添っているけど可愛らしいところのある友人えっちゃんとの距離も絶妙で、1988～1992年といういわゆるバブル期に雑誌「Hanako」に連載されていたのが信じがたいような現代性。ひさしぶりに読み返したら随所でクスクス笑いながらも、たまにはこういうのもいいわねとお風呂に入りつつコーヒーを飲んでいたるきさんがお風呂でまる一日を過ごせたらと想像をしてみたけど結局はしない、「なんてったって大人だしさ ちよっと考えてみただけです」というところで頁を繰る指が止まったり。

わたしの都会暮らしはいろんな点と点が偶然つながってきたから発火してしまうような熱いものはなかった。けれども終わってしまう時が来るのだとしたらその時はくっきりはっきり自分の中になにかが刻まれるのだろう。そういえば自分の将来なんてものがまだまったく見えずに日々モヤモヤしていた高校生の時、ラジオから聞こえてきたこの歌がほんとうははじまりだったのかも。そしてそのいつかの時も口ずさむのかも。

「その日暮らしは止めて 家へ帰ろう一緒に」（「都会」 作詞作曲大貫妙子）

なんてね。ちよっと考えてみただけです。

R.S.Books 高田敦子

※こちらの商品は1点限りですので売り切れの際はご容赦ください。

〈ブログ〉<http://kosho.blog.jp> 金井書店news “商品のご紹介” “日記” “お知らせ” “出張買取”